

鎮魂歌「海行かば」

理事長 森 勉

「海行かば」は現在では慰霊祭などで鎮魂歌として、よく歌われる。日本軍や自衛隊関係者にとつて大変親しみ深くかつ感動的な歌である。この詞は大変平易で分かり易いが故に聞く者の想像を掻き立てる。

「海行かば水漬く屍

山行かば草生す屍

大君の辺にこそしなめ

かへりみはせじ」

この詞は奈良時代中期、聖武天皇が大仏建立時我が国で初めて金が発掘されたことを喜んで宣命された「陸奥国出金詔書」の中で、近衛兵たる大友氏と佐伯氏に対し、確固たる忠誠を求めた下りである。これに感激した大伴家持がそれを引用し長編の歌を作ったものの一部であり、万葉集卷十八「賀陸奥国出金詔書歌」に収録されている。この詞の源流は神武東征時の久米の兵の戦闘歌謡ではないかと思われる。

私はこの詞に接するたびに聖武天皇は何をイメージしてこの詞を作られた

のか、如何なる史実に基づいて出来たのか、そして陸上自衛官であった者としては何故海が先で山が後なのか等と想像を逞しくしている。

特別な史実ではなく一般論としての詞なのか、或いはその当時としては衝撃的な史実である、663年の白村江における唐の大艦隊との海戦による大敗北、それに引き続く672年の大海皇子による吉野から美濃への逃避行、そして近江宮への進撃という壬申の乱をイメージしたのだろうか。はたまた日向から瀬戸内海を海路東進し難波に上陸手痛い敗北の後、熊野に南下、紀伊山地を陸路北上し大和盆地に侵攻した神武東征という建国神話をイメージしたのか等と、思いは尽きない。

「海行かば」は戦前・戦中国民の戦意高揚のために歌われたこともあり戦争賛美であるという極端な主張もある。しかし本来は国民歌謡であり歴史ゆかしい兵の鎮魂歌である。

白村江の敗戦・元寇まで遡れとは言わないが、少なくとも明治維新以降の戊辰・日清・日露・大東亜戦争等で、国家に徴兵され国家の為に戦死した英霊の慰霊は国家が執り行うべきである。それが叶わぬならばせめて「海行かば」の歌で英霊を慰霊したいものである。